

## 「安宅の関」(佳純)

### 遺跡を巡る

あとか せき  
安宅の関は石川県小松市にある、平安末期の関所跡である。源平合戦の終わりごろに活躍した、源義経を捕らえるための関所。

歌舞伎の勧進帳は、この場所で起こった話を元になっている。

けっこう有名な話らしい。

JRの小松駅前には弁慶の像が、小松空港に行く橋にもそれらしい像があった。それを見て、実はうずうずしていた。

そんな遺跡があると知って素通りできるはずがない。歴史を調べるのは好きで、神社仏閣に行き、御朱印をいただくのが楽しみのひとつである。

歴史的なことが起きた場所に行く。

これは、けっこう楽しい。

小さな画面や本の中ではなく、見えているもの全てがその場所になり、その出来事の主人公とも言えるべき人物が見て、触れた物がそこにあるかもしれないのだ。

ロマン  
浪漫である。

それに、現地に行くと、面白いことがたくさんある。紙に文字として書かれていた言葉が、自分の中にすんなりと入ってくるようになる。

本で読むのも楽しいが、その物語の舞台が現実にあるのなら、行ってみたいと思ってしまう。一度行くと、クセになる。

もしも想像力に自信があるのなら、現地に行って、時間も旅行することをお勧めしたい。

### 石川県と私

私が安宅の関が現実に存在していると知ったのは学生の時だった。当時は石川の大学に通っていて、たまたま近くを車で通りかかった。

道路標識を見て、銅像を見て、それを知った。

それまでは、どこか架空の物語のような気がしていた。

自分が普段生活している場所に、いきなり現れた物語の世界。

当然、興味を持った。

しかし、石川県に住んでしばらくは安宅の関に行っていなかった。学業のこともあり、微妙にタイミングがずれた。機会があれば行けるだろうと思っていたら、意外と行けなかった。

けれど、予定もしていなかった時、その機会は訪れた。

学食で昼食を取っていると、たまたま会った友人が、「帰省するから小松空港まで乗せてくれないか」と言ってきた。

予定していた人に用事が入ってしまい、空港までの足がなくなってしまうらしい。

午前中は講義を取っていたが、午後は何もない日で、たまたま時間があった。

二つ返事で引き受け、友人を小松空港まで送った。

友人を見送ると帰りはひとりになる。大学に戻ろうとしていると、やけに『安宅の関』という文字が目に入ってくる。テストもなく、教授に提出するレポートもなく、こつこつと卒論を書けばいいだけの状況。

「これは、呼ばれている」

そんな状況を、見過ごしてはいけない。

大学に向かっていたが、広い道路をUターンしていた。

## 安宅住吉神社

看板に従って運転していくと安宅の関に着いた。あっという間だった。小松空港は帰省のために度々使っていたのに、どうして今まで来ていなかったのだろうというくらい近かった。

はじめは何もないところに石碑がぽつんとある状態を想像していた。関所跡の『跡』が私にそういう想像をさせた。しかし、ちゃんと駐車場があった。無料で停められたし、運転技術のない私でもなんとかなる広さがあった。

そこに車を止め、外に出る。小雨がぱらついていたので、車に常備してあるビニール傘を持った。

関所跡には神社があった。だから、駐車場もしっかりしていたようだ。

思っていたよりも綺麗だった。もっと苔むした石像があつたりするような、人外なおどろお

どろした雰囲気を想像していたが、神社があったためか空気が清浄な感じがした。掃除も行き届いていた。

安宅の関と書いてある看板の下に、神社の奥にに向かって矢印があり関所跡と書いてあった。神社までの道は木が生い茂っていて、雨で空気に元気があって、いい感じがした。

でも、坂道はきつかった。重力が私を引き戻そうとしていた。私が登ることためらっているのか、何か別の力が引き戻そうとしているのか。どうでもいいことかもしれないが、道を上るのは苦手である。

坂を上りきり、鳥居をくぐった先に神社があった。手を洗ってお社やしろの方に行くと、巫女さんと神主さんが居た。お社の中には、数人の参拝客らしき人たちもいた。団体客のように見えたので、自分はマイペースに行こうと思っていたら、ニコニコした神主さんが「どこから来んだい？」と聞いてきた。

一瞬、なんと答えるべきか迷った。

車で30分の場所に住んでいたけれど、観光客だと思ってもらいたかった。神主さんからいろいろなお話を聞いたかったからだ。

遠くから来た観光客なら、至れり尽せりに説明してくれるかもしれないけど、それだと申し訳ない気もする。かといって、正直に今住んでいる場所を言えば、近場なんだからと説明してくれないかもしれない。当時は初心うぶな学生だった。

とりあえず

「大学に通っていて、近くに住んでいます」と答えた。

地元民ではないことを表現したかった。今思うと、よく分からない日本語だった。

けれど神主さんは、

「関所の話を聞いていくか？」と笑顔で言ってくれたので、いちもにもなく「はい！」と答えた。

## 勸進帳

神主さんが説明してくれるのかとっていると、神主さんはお守り売り場にいた巫女さんに目で合図した。すると、その巫女さんが出てきて勸進帳の話をしてくれた。

それまでは勸進帳といえば、義経が弁慶に殴る蹴るの暴行を受けたという程度にしか知らなかった。巫女さんのお話では、安宅の関というのは箱根の関のようにいつもある関所ではなく、

源頼朝が弟の義経を捕らえるために臨時に設けたものだったらしい。

以下に巫女さんからの話をまとめた。

-----

本来ならないところに関所があったわけですから、義経主従は困ってしまいました。そして、近くで遊んでいた子供たちに、どこか関所を通らずに行ける道はないかと訊ねます。扇を渡して情報を得ようとするのですが、たまたま(ここをととても強調していた)扇が一本足りません。だから、子供たちは抜け道を教えてくれませんでした。

他に道はなく、関所を通るしかなくなりました。そこで、義経一行は勧進していることにして、山伏の格好をして通ることにしました。勧進というのは、お坊さんが寄付を募って地方を渡り歩くことです。そうすれば、関所を通ることができると考えました。

けれど、関守のとがしさえもんやすいえ富樫左衛門泰家は彼らを怪しみ、勧進をしているのなら証拠を見せろと言います。そこで武蔵坊むさしぼうべんけい弁慶は何も書いていない巻物を勧進帳だと言い、それを広げると、さも書いてあるかのように読みあげます(その内容は石碑に書いてあることを教えてくれた)。

その甲斐あり「通れ」と言われます。けれど、最後にいた荷物持ちの振りをした義経が目をつけられてしまいます。

「義経ではないか？」と言われてしまうのですが、機転を利かせた弁慶が、「またお前か。お前のせいで何度足止めを食らっていると思ってるんだ！」と言って、殴る蹴るの暴行を加えます。

その姿に心を打たれた富樫左衛門は、彼らを義経主従と知って関所を通します。

これが歌舞伎の勧進帳で、ここはその舞台となった安宅の関です。

-----

富樫さんが義経主従だと『知って』通したところがポイントらしい。

安全だと思っていた場所に、いきなり関所があって義経主従はびっくりしただろう。悪いことなにもしてなくても、おまわりさんがいたら驚く。

いきなり道路で検問をやっていたという状況で、しかも自分が探されてい犯人だったとしたら……。

それを想像して、一緒に緊張してしまった。

お話が一段落すると、なんとなく巫女さんと目が合って、にっこりと微笑みあってしまった。巫女さんから話を聞いている間に、先に建物の中を見学していた方たちの話が終わり、入れ替

わるように私も建物に入り、中にある宝物の説明を受けた。

羽子板と同じように、板に布で勸進帳のシーンが描いてある絵。版画も江戸時代後期の珍しい物らしい。三枚で一枚の絵になっているが、手作業なのでどうしてもずれてしまうようだ。

また、今もあるかわからないが、由緒のあるお家から奉納されたらしい武器も面白かった。とげとげがいっぱいついた、大きくて持ち上げるのが大変そうな武器や、さすがの実物も置いてあった。錆びている感じで少し怖かった。

だいたい説明が終わり、また意味もなく、巫女さんと微笑みあってしまった。

笑顔が素敵な巫女さんに案内してもらえて、嬉しかった。

安宅住吉神社は、勸進帳にちなんで難関突破のお守りが有名らしい。

買っておけばよかったと後になって後悔した。

すぐに来れると思って買わなかった。

また行くことがあれば、今度は買いたい。

## 関所跡で思ったこと

お礼を言い、それからひとりで神社をお参りして、周りをうろうろしていると、神主さんが「裏に行くと、関所跡がありますよ」と教えてくれた。

肝心なところに行っていなかったことに気づいた。

雨が降っていたので歩きやすい道を教えてもらい、その道を行くと小さなお社があった。お参りして関所跡に向かう。

与謝野晶子の歌碑があり、松という字が目に入る。松？　と思いながら左に行くと、松に囲まれた『関所跡』と書いてある石碑があった。

この松のことだろうか？　そもそも私に歌心はない。

でも、ようやく関所跡に着いた。

一回りに1分もかからないくらい小さな場所。元々の想像通りだったが、もっと道をふさぐような物でなければならぬのではないかと？　そうでなければ、義経は子供たちに扇をあげなくとも済んだだろう。

現在の神社の近くに、必要もない関所があっても困るだけかもしれないけれど。

しかし、この感じは嫌いではない。

石碑がぼつんとあるだけ。その周りに自然がある。

ここに関所があったのは八百年も昔のこと。人がいなくなれば、あっという間に草木で覆われる。人間の感覚からすると長い時間だけど、自然界から見れば一瞬かもしれない。

その先に階段があったので、下ってみると海があった。

そこに勸進帳の像が立っていた。像の前に説明が書いてあって、はじめに弁慶と富樫さんの像がでてきて、その後その像を作った人の息子さんが義経の像を作って、像の前に書かれている文字をまた別の方が書いたという。

父から子へと繋がり、その先も繋がっていく。点ではなく線、そして面になり、立体になる。

石川はかなり昔から教育に力を入れているらしい。だから知識が途切れないのだろう。また、まっすぐな物は曲げ、曲がっている物はまっすぐにすると、金沢城で観光ガイドをしていた『まいどさん』から教えてもらった。

安宅の関と、そこにいたであろう富樫左衛門。彼は悲劇の英雄が北に逃げるために手を貸した。追われている人間を逃がしてしまうのは曲がったことかもしれない。

吉野山で行方をくらませた義経は、命を落とすことになる平泉に行くまで、どのルートを通ったのかわからないらしい。安宅の関を抜け、能登半島の先まで行き、船で東北に行ったというのも有力な候補のひとつ。しかも、この辺りには義経の伝説が多く残っている。

けれど、それが史実になってはいない。

つまり、当時の人たち、義経に会った人たちは、義経の行方を誰も正式に通報しなかったのではないか。

通っても見て見ぬふりをしてくれた。

義経主従だと知って、通してくれた富樫左衛門のように。

当時は曲がったことだったけれど、時間が経ってまっすぐになった。英雄伝説として。

石川の人たちは、この物語を大切に後世に伝えようとしている。

安宅の関では巫女さんがとても素敵だった。もちろん、神主さんも。

人々の温かさに触れることができ、嬉しかった。

ありがとう、物語を伝えてくれて。

私がおこに來るきっかけを作ってくれて。

雨が降っての鈍色に輝く日本海を見ながら、そんな気持ちになった。